

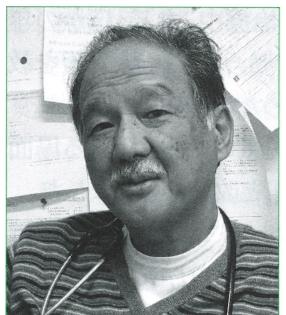
こころにとまつたこんな取り組み①

多職種協働による演劇を通し 地域包括ケアを推進

(兵庫県神戸市)

神戸市垂水区は人口約22万人、うち65歳以上の高齢者が約6.3万人と神戸市のなかで高齢者の割合が一番多い区です。地域で安心して最期まで暮らすためには、医療や介護に携わる専門家の連携が不可欠です。同時に、住民もそのことを理解し、必要な社会資源を上手に活用することが求められます。垂水区では、医療・介護関係の多職種が協働し、自分たちで作った演劇を上演し、市民に考える機会を提供してきました。中心になって取り組んでいるお一人、医師の中村治正さんにお話を伺ってきました。

(まとめ 村上朝子)



なかむらクリニック院長
中村 治正さん

●多職種間で顔の見える関係を

垂水区でクリニックを開いており、訪問診療もおこなっています。訪問看護ステーションやケアマネジャーの事業所を併設しているわけではないので、在宅医療をおこなう際には地域の訪問看護師やケアマネジャーと一緒に取り組むことが必要でした。

2000年に介護保険制度ができ、利用者の医療や介護に多職種がかかわるようになりましたが、実際はFAXや電話で連絡を取り合う程度で、顔も見えない関係ではたしてきちんと「協働」できているのか、との疑問がありました。そこで、ケアマネジャーや看護師、薬剤師、歯科医師、介護職、医師に声をかけ「神戸西医療・介護地域ケアネット」を2009年3月に設立しました。名前が長いので、「エナガの会」と呼んでいます。エナガというのは、親鳥以外の鳥もエサを与えて子育てに協力する「ヘルパーバード」と呼ばれている鳥で、それにちなんでつけました。

エナガの会では、毎月テーマを決めて勉強会や意見交換会を開き、多職種がお互いの仕事や考え方を学び、相互理解が進みました。話し合いを重ねるなかで、制度に対する疑問や不満が出てくるようになり、行政の

人に参加していただく必要性を感じていました。

そのようなとき、垂水区医師会で垂水区地域ケア推進検討委員会(垂水在宅医療介護福祉連携委員会)が2010年3月に立ちあがり、私も医師会を代表して参加しました。ここには医療、介護のそれぞれの団体を代表する人たちが集まり、垂水区保健福祉部健康福祉課など行政の方も参加していました。

通常介護保険を申請してからサービスを受けられるようになるまで1ヵ月かかるのですが、がん末期の場合それでは間に合わないということで、そのようなケースに対する「緊急申請」や「当日審査組み入れ」制度を神戸市独自で導入していただくなど、ここは現場における声を集結し課題を解決していくための貴重な場になっています。

●地域包括ケアを 市民に知ってもらうために

そのようななか、市民の皆さんに地域包括ケアのことをもっと知ってもらいたいという声があがり、2012年7月に市民フォーラムを開きました。「退院を告げられたら…私たちが支えます」と題して、行政、病院の地域連携室、ケアマネジャー、介護施設、在宅医、訪問看護師、薬局薬剤師など多職種の専門家が、自分たちの仕のことについて話をしました。

しかし反応はいまひとつでした。そこで長田区で認知症の理解を進めるための劇をおこなっている、くじめ内科医院の久次米医師に主役の裕次郎役を演じていただき、2013年2月に、前年と同じ内容を劇仕立てにしてみました。シナリオ、役者、裏方、音楽、照明などすべて多職種による手作りです。少数のメンバーでテーマにつ

いて考え、意見交換をし、映画監督が夢だった社会福祉士の木村和弘さんが脚本第1稿を作成します。それをもとに少人数で話し合い、作りあげていきます。その後、毎週のように皆で集まってシナリオを練りあげ練習を重ねました。看護師は看護師役など基本的に自分の職種の役をします。

その結果、第1回の講義のときと比べ、観客の反応は格段によくなりました。「在宅で受けられる支援がわかった」という選択肢に「非常にそう思う」と答えた人は、第1回の40%弱から70%以上になり、「退院について安心感が増した」に「非常にそう思う」と答えた人は、25%から約60%に増えました。

観客の反応に大きな手ごたえを感じ、翌2014年8月は「認知症の人たちも…私たちが支えます」、2015年11月は、「幸せな人生を送るために～終活って何?」を上演し、リビングウィルや在宅死のことなども盛り込みました。市民からのアンケートでは「デリケートな問題ですが、劇にすることで理解しやすくてよかったです」「さっそくエンディングノートを作成します。家族と今後について話し合います」との声もいただきました。

2016年9月は、「幸せな人生を送るために～高齢者施設とは?～」、2017年11月は、「裕次郎さんのまちづくり宣言～認知症の人にやさしいまち!3つの提案～」を上演しました。

●劇上演の効果

劇を上演することで住民の理解が進むと同時に、身近な職種が出演している劇を見ることで親近感や安心感が得られるという利点もあります。「相談できる方が地域にたくさんおられるということがわかりました」とアンケートに書いてくださった方もいました。

劇の効果は、劇づくりに参加した専門職にもよい影響を及ぼしています。「頼みにくいことも『あのひとなら』と思い、依頼や連絡をすることが可能になる」「終了時の一体感は、ほかでは決して得られない体験であり、今後の業務で起きた問題点も解決できそうな気になれる」などの感想が届いています。

第1回に参加した専門職は10職種23名でしたが、第6回では20職種70名が参加してくれました。悩みは、いろいろな職種の方にかかわっていただくと、劇が長くなってしまうことです。第6回は途中休憩を入れ約3時間の長丁場になってしまいました。

●ほかの地域でもぜひ!

私たちの劇を見て自分たちのところでもやってみたいと問い合わせもいただいています。「幸せな人生を送るために～終活って何?」は神戸市北区でも上演しまし

た。淡路島からも希望があり、スタッフ数名で手伝いに行きました。私たちの作ったシナリオをもとに、その地域に合ったものに調整し、役者もその地域の専門職の方たちに出てもらいます。イチから作りあげるのは大変ですが、どこでもどの職種にも核になる人がいるのでノウハウを含めたサポートがあればどの地域でもできるのではないかでしょうか。まずは、行政と医師会が協働することが大切です。それによって、より多くの職種が集う場を作ることができます。DVDのほか脚本や劇ができるまでのプロセスを見る化した解説書も作成中ですのでご関心があればぜひお問い合わせください。

いつもお世話になっている医療者や介護職の方が一生懸命演技する姿に親近感を覚えるとともに、具体的があるので難しい説明ではわからなかったことも理解ができる—そういうメリットがあるのだと思います。また、演劇という医療者・介護職にとっては“専門外”的ことを共に作りあげることによって、従来の上下関係もなくなり、お互いを理解する機会になるという利点もあるのでしょう。それぞれの地域に合った方法で医療者と介護職が横並びの関係になることが、患者側の医療・介護を切れ目なく利用することにつながっていくと感じました。



劇づくりに参加した大勢の多職種の専門家 (C) エナガの会



劇の一場面 (C) エナガの会